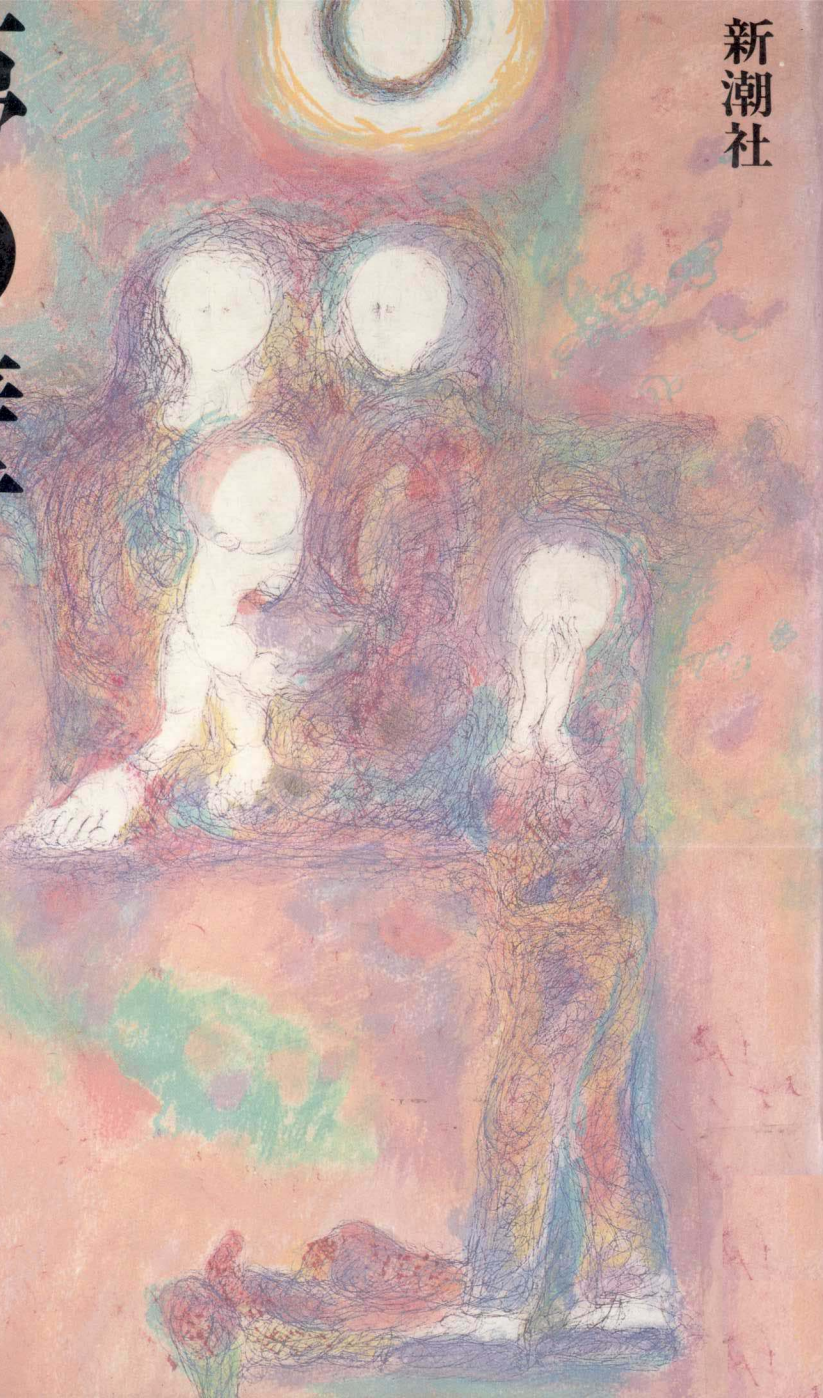


新潮社

夢の壁

加藤幸子



新潮社

夢の壁

加藤幸子



夢^{ゆめ}の壁^{かべ}

一九八三年二月五日発行
一九八三年二月十日二刷

著者 加藤幸子^{かとうゆきこ}

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社
東京都新宿区矢来町七一

郵便番号 一六二

電話（業務部） 03—二六六—五一—

（編集部） 03—二六六—五四—

振替 東京四一八〇八

印刷 株式会社光邦

製本 加藤製本株式会社

定価 九五〇円



© 1983, Yukiko Kato
Printed in Japan

ISBN4-10-345201-3 C0093

（乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛お送り下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。）

目次

ぼくのクオ・バデイス

5

野餓鬼のいた村

79

夢の壁

159

装画 高山辰雄

夢の壁

ほくのクオ・バデイス

しばらく前から、ぼくの体の中に白い鳥が巣をかけていた。昼間は光に溶けこんでどこにいるのか分からないが、夜になると枯草の上に前こごみに座っている姿がわりにはつきり見えた。それはぼくの想像が炙^{あぶ}り出した鳥であることは明らかであつたが、ぼくはそれを追い出さなかつた。さらに無責任にも、その炙^{あぶ}り絵がどこまで現実に肉薄するものか、見とどけたいと思つていた。それがどこから来たのか、ぼくは不思議でしかたがない。それは知らぬまに来て、昔から居るような顔で座っているのだ。そして心が鋭く痛むとき、ぼくは胸壁をへ鳥^こがむしつているのだと考える……。

特急電車は外の風景をなぎ倒しながら走りつづけていた。車内には硝子で漉^こした疎^こらな光と埃が漂っている。ぼくはボックスの窓際に座り、向い側には小さな男の子と母親らしい女がやはり光と埃に包まれて眠っていた。女の脇腹に膨らんだデパートの買物袋がよりそつて、彼女を妊婦

のように見せている。東京発十時二十分Ⅰ特急。通路をふさぐ者はだれもいなかった。数人の男客が、細長い空間に足を突き出して眠っていた。Ⅰ市が東京の通勤圏に入ったのは、三年ほど前だった。早朝と黄昏期にくり返される壮絶なラッシュの狭間の深い河底をぼくは今走っているのだ。Ⅰ特急を計画しただれかは何を期待したのであろう。東京という巨星を巡る一個の衛星に、Ⅰ市を転落させることだったのか。

ぼくは窓から外を見て、自分の位置を確かめようと何度も試みたのだ。そのたびに樹木や家々は飛矢の如く去り、ぼくは自分を固定することに失敗を重ねた。形のないものは常にぼくを不安にさせる。たとえば与えられたばかりのマチエールとしての粘土の塊。ぼくはアミーバのようなそれに急いで立ち向かい、息を切らして殴ったり、削ったりしながら形を造り出す。ただただ不定の不安から逃れるために。

ぼくは十年ぶりの帰省にⅠ特急を選んだことを後悔しはじめた。時間だけはたっぷり持っているくせに、新品の車体と快適そうなシートに魅かれて特急券を買ってしまった。鎖の目のように駅と駅とをつなぐ鈍行こそ、ふるさとに帰る男に最もふさわしい乗物だったろうに。

ぼくの二つの旅行鞆は、東京―Ⅰ間を一時間三十六分で駆けぬける電車には大げさすぎる。手廻品はわずかなのだが、写真屋を一軒開業できるほどの道具が入っているのだ。イーリヤス・フレックスだけは赤ん坊のように膝に抱いてきた。

ぼくはもう一つ大事な荷物を持っている。それはだれの目にも見えないが、全世界よりも重くぼくを規定しているのだ。ぼくは〈へ鳥〉のことをだれにも話すつもりはない。

七年前、ぼくは私立の造形科を趨勢に押し出されて卒業した。あるカメラ会社がぼくを拾ってくれた。そして貧しい才能を蚕が糸を吐くように繰り出させて、専属のカメラマンに育ててくれた。イーリヤス＝カメラKKは下請けの町工場から戦後のブームに乗ってみるみる業界の一線にのしあがった。その秘密は独特の人材発掘の方法にあるようだった。自分では何をしてよいかわからない無色透明の若者たちを大量に買い上げて、根気よくイーリヤス調パステルカラーに染めあげるのである。どうしても染まらぬ不従順な素材は、順ぐりに篩い落としていく。ぼくが最後まで残ったのは、たぶんぼくの物ぐさな性格がこういうお仕着せにびつたりだったからだ。

ところが数年前から、社員のおいだに変な病気がはびこりはじめた。それにかかるとしじゅう溜息ばかりこぼすようになり、パステルカラーは潤んだ灰色に濁らされてしまう。胞子を飛ばす菌類のように、それは伝染するらしかった。もちろん仕事の能率もがっくり落ちるので、イーリヤスでは医師団を編成し全社員に年二回の精密検査を行った。医師団から「憂鬱症」の恐れありと見なされた社員には、一年あるいはそれ以上の休養期間が与えられた。ぜいたくをしなければ飢え死にしない程度の療養費が支給される。自宅待機のあいだに本物のノイローゼにかかり社をやめる者もいれば、よく太って骨まで柔らかくなって戻ってくる者もいた。

けれどぼくはカメラマンである。イーリヤスに飼われていようと、写真についてはいささかの自負もあった。ぼくの腕を鈍らせる空白の期間を招くわけにはいかない。ぼくは集団検診の医師に何も告げない決心をした。

それにぼくの中に棲む鳥は、ぼくにもだれにも全く無害であった。ぼくが仕事をしているときには、決して顔を出さない慎ましきも持っていた。第一「へ鳥」がいたい所にいることは「へ鳥」の自由だった。もし「へ鳥」がふいに逃げ去ったら、ぼくはかえってその空虚を埋めるために苦勞するだろうと思う。

それにしても体の中に巢籠りの鳥を抱えている気分とは、独特のものである。インドに旅行したところのある西條霞は、このごろぼくが「ガンジスの岸辺から水面を眺めているような」目付きをすると指摘した。女の直感はずい、とぼくは思っている。実はぼくはそういうとき、紛れもなく自身の内部に降りていたのだ。たしかにそこはガンジスよりも、はるかな地点にちがいない。

「ネ、才窓ヲ開ケテチヨウダイ」

男の子は上目遣いにぼくを見ながら、母親を揺すぶっている。飛ぶ木、飛ぶ家、飛ぶ電柱……ぼくも子供もあきあきしていた。

「だめよー、風がほらあんなに。ゆう君は吹きとんでしまいますよ」

女は嚇すように窓外を指して言った。男の子はふて腐れて窓を叩いた。

窓は頑固に気密性を保っていたが、風の咆哮の侵入を防ぐことはできなかった。うたた寝から目覚めた乗客たちが、ときどき不安そうにあたりを見回していた。風の中には一滴の雨もないのだ。乾いた空気の渦が電車を引っつかみ、骨のようにきしませる。ぼくは鋼鉄の表皮が引き剥がされ、軟い真皮が露出するところを想像した。そのとき風は粘土のように電車をこねくつて、新

しい形を造るだろう。

ぼくがへ鳥について口を滑らせたただ一人とは、西條霞である。そのときぼくは彼女の部屋にいて、全身くまなく無防備の状態にあった。霞はにぎにぎしい色彩のバスタオルを腰に巻きつけて、部屋の中を歩きまわっていた。そういうとき言葉は得てして無造作に逆流してくるものである。

「ねえ、君も小学校の遠足でT湖に行ったことがあるだろう？」

T湖はわかさぎ釣りで有名なI県の観光地である。しかし霞はちよつと立ち止まっただけで、ぼくの言葉を無視した。

「そこに白い鳥がたくさん浮かんでいたような気がするけれど覚えていない？」

不自然な沈黙にぼくはまだ気づかなかつた。ぼくはへ鳥が小学生のころT湖で焼きつけられた印象から派生してきたのではないかという発想に熱中していた。だがT湖の鳥の実体は何であつたのか確信がなかつた。それはもしかしたら生きてゐる鳥ではなく、鳥の形をしたゴムボートかもしれない。わかさぎ漁の白い帆が遠くで動いているのを、ぼくの幼い心が鳥と捉えたのかもしれない。ぼくは壁に突き当たったときのくせで、ぼくの年上の女友達に頼りかかつた。「ぼくの中にそいつが入っちゃったらしいんだ。そいつの原型を探し出さないうちは、落ち着かなくて困る」

霞はキッチンから二個の水割りグラスを運んできたところだつた。この弱々しい最後の告白を

聞くと、彼女はぼくが我にかえたほどの荒々しさでお盆をテーブルに置いた。

「あなたが自分をロマンチックな人間に仕立てるのは自由だけれど、あたしがあなたの感傷におつきあいするのは限度があるのよ」

「でも……」とぼくは口ごもり、やっと気がついた。霞の言葉にはI県に多いヒレアザミの茎のように怨みの棘が生えていて、ぼくを刺したから。

電車が急停車した。鋼鉄の唸りがうめき声に変わり、余韻がかすかな振動となってぼくらを包む。特急が止まるときは、よほど非常の場合だろう。両側には切り立った空間があった。県境に掛けられた鉄橋の真上である。はるか下方に騒ぎたつI川の水面が見えた。岸辺から攻めこんだ葦原が強風にめくられて、流されかけていた。風はふたたびぼくたちの車輛をわし掴みにした。子供がプラモデルをいじるように線路からはずそうとしていた。風が梃子になって、車体の下に潜りこむ瞬間のことをぼくは想像した。心臓が少し苦しかった。

「ママ、才窓開ケテチョウダイヨ」

男の子は不屈の意志でねだり続けていた。

「しっ！」母親が言った。車内放送が始まっていた。母親が男の子の手を握りしめた。

「乗客の皆様にお知らせいたします。ただ今突風のためこの先の線路にビニールが巻きつきまして、除去作業中であります。しばらくお待ちください」

ごく日常的な声が風の恐怖を遠ざけた。乗客の顔が緩むのが見えた。だがぼくの動悸は簡単に

は収まらない。

ずっと昔、紙で町を造った。平屋や二階建てのほかはまだ見たことのないビルディングまで林立させたので、一週間もかかってしまった。町が完成した日、ぼくは山蟻の巢を毀し、無数の働き蟻を広口壘に採集した。蟻たちを紙製の家に放すと、マツチをすって点火した。焰はしびれるほど美しく、ぼくの耳には蟻たちの阿鼻叫喚が聞こえた。その場を通りかかった親爺がぼくをはり倒し、こういうことをする奴は地獄で蒸し焼きになるだろうと警告した。ぼくは泣きながら、不満だった。ぼくが苦心して造った町は、灰になるために存在していたからだ。ぼくには所有権があった。蟻たちのことはあまり考えなかった。彼らは町の付属物にすぎない。だれかが作った鋼鉄の箱の中に閉じこめられているぼくと同じだ。

「次で降りのよ。ちよつと待っててね」女は子供にチョコレートを握らせると、化粧ケースを持って立ちあがった。こんなに風の吹き荒れる中で、眉を引いたり、口紅を塗り直す気持が起きるのだろうか。ぼくは呆然と洗面所に入る女を見送った。

西條霞は、イーリヤスKKが後援している地元タウン誌の記者であった。巷間の話題をたくさん載せて合間に広告頁をはさむ洗練された雑誌だった。駆け出しカメラマンのぼくが、初めて霞に会って仕事の指示を受けたとき、ぼくは彼女とこの雑誌の雰囲気は瓜二つだと思った。しかしものの十五分とたたないうちに、ぼくは幾らか変わる気持になった。ぼくは抑制の効いた標準語で話している西條霞女史を上から下まで眺めた。全身を耳にして彼女の発音に傾注し、ぼく自身

のくせでもある尻上りの語尾が来るたびに、彼女がそれを下げようと努力するのが分かった。ぼくは急に笑いたくなくなった。

「西條さん、ぼくもI県なんですよ」

そのときぼくは相手がチューインガムを喉に詰めてしまったのではないかと慌てた。西條霞の顔は赤紫に染まり、それを隠すように硬い仮面が現れた。彼女は説明を中止して、出ていこうとする気配すら見せた。けれど新入社員を置き去りにする決心もつかなかったらしい。彼女は少し吃りながら、呆氣にとられてぼくに言った。

「込みいった話になりそうですから、あとでゆっくりお会いしましょう。六時に駅前のゴルフで……」

周囲には単に打ち合わせの延長と思われる調子であった。ぼくは約束の時間に指定された喫茶店に行き、そこで落ち着きを取りもどした西條霞がぼくを待っていた。

コーヒーの香りの向う側で、トルコ玉が揺れていた。白色を通りこして透明に近い胸もとが正面にあった。ぼくは遠慮なくそれを見つめた。石が青い瞳のようにぼくを見返した。ぼくは色の浅黒い女は嫌いだった。

「物語の続編を聞かせましょうか」

西條霞は笑いながらぼくに言った。

「白状すれば、ずばりI県です。まいったわ。Iの人が仕事の相棒になるなんて」
そのときふたたび彼女の喉が引きつれるのを感じた。ぼくはこの年上の女記者が、ぼくと共通